

# 東京大学史史料室ニュース

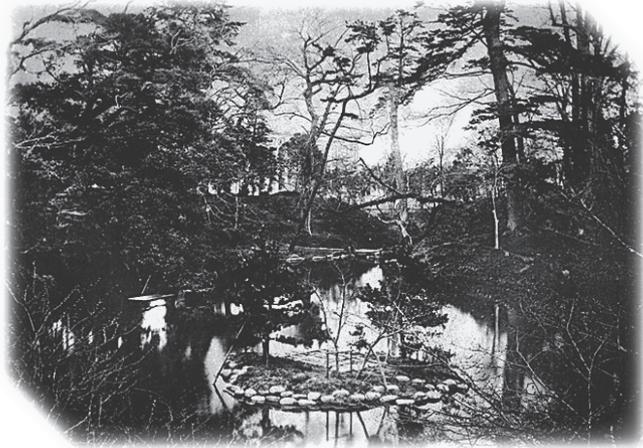
第41号 2008・11・30

## 目次

大学アーカイブズー過去と未来の橋渡しにー…………… 2  
 1930年1月の立山劔沢遭難事件にあたってー本学学生らによる自己点検・活動報告ー…………… 4  
 受贈図書一覧…………… 6  
 史料室日誌抄録…………… 8

### 「構内の池」

『東京帝国大学五十年史 下冊』  
 1932年11月20日刊  
 発行：東京帝国大学



### 「三四郎池危篤」

『学内広報NO. 653』 1984年10月15日刊  
 発行：東京大学広報委員会

三四郎池の歴史的環境

### 「心字池集」

『戦時鉄門』 1944年7月1日刊  
 発行：帝国大学新聞社出版部



## 心に沁みるいい映画

「北辰斜にさすところ」という映画を見た。聖路加国際病院の日野原重明氏はこの映画に「心に沁みるいい映画」と賛を寄せている。題名を見てピンと来る方は世間一般には少ないだろうが、本誌の読者であればすぐにお分かりの方も多しことだろう。そう、旧制第七高等学校の代表的寮歌を表題とするこの作品は、七高野球部の創部百周年記念試合を題材にした映画である（なお、本稿は映画のネタバレに通ずる記述も含んでいるため、発売中のDVDを購入して楽しみたい方は「旧制高等学校の想いを受け継ぐ」まで読み飛ばしていただきたい）。

七高野球部時代、対五高戦で3年連続完封勝利を収めた伝説の投手上田勝弥（三國連太郎）は、東京に開いた個人医院を今では息子に託し、高校野球で活躍する孫の姿をたまに見に行くことを楽しみにしていた。

その頃七高同窓会では野球部創部百年記念として、宿敵五高との記念試合の話が持ち上がる。もちろんフィールドに立つのは年老いた彼らではなく、鹿児島大学と熊本大学の野球部員である。部員たちには百年前のユニフォームを着せて対抗戦を再現する企画であった。しかもこの記念試合に伝説の投手上田勝弥を招き、彼の生まれ故郷、熊本県人吉市の川上哲治記念球場を会場として五高同窓生の鼻を明かすのが密かな目論見だった。

しかしその肝心の勝弥が大会への出席をにべもなく断ったから七高同窓会は大騒動である。勝弥の心の奥底には何が秘められているのか、そして記念試合の行方は、というのがこの映画の見所といえよう。

## 旧制高等学校の青春

上田勝弥が青春時代を過ごした七高造士館には同じ人吉市生まれの先輩、草野正吾（緒形直人）がいた。その風貌、人格、そして3度ドッペリ6年在校したことからミスター七高生と称された彼は、勝弥の憧れでもあった。

長髪、ひげ面、弊衣破帽、マントに高下駄、寮歌にストーム、ローベン、ドッペル、メッツェン、リーベ。映画には旧制高校のエレメントが随所に現れ、旧制高校を知る者や旧制高校にあこがれた者たちの心をぐっとつかむエピソードに溢れている。

とりわけ記念試合の会場を人吉市に決定する場面

での駆け引きや、鹿児島島の「ベルグ」山形屋デパートのマドンナ、ナポレオン嬢との遣り取りの際の彼らの機智は微笑ましい。また、例えトイレに行くといえども寮の部屋から一步出るには袴を履かねばならぬというきまりがあり、その一方で禪一丁ならば許されるという理不尽極まりないこだわりなど、七高生の面々の魅力に取り込まれるところとなる。

旧制高校生の生活が非常に分かりやすく描かれており、彼らの抱いていたロマンや矜持をうかがい知ることが可能である。大学で旧制学校の話をする筆者のような者にとっては、教材としても好都合である。もちろん、旧制高校の教育を礼讃するわけではない。彼らの生き方から我々後世、そして未来の人間が学ぶべき事は何か、ということを一一人一人に考えさせるためである。

## 映画の内容を深めたい方には

映画は限られた時間で表現しなければならぬため、時に納得できない部分も出てくる。例えば慶応大学医学部に進み六大学野球で活躍することを夢んでいた孫の勝男が、突如鹿児島大学に行くと言います。それに対し父親で開業医の勝弘（林隆三）は「地方に行ってみるのもいいかもしれないな」などと意外な発言をする。勝弥もまた「そりゃあいいじゃないか」と止めはしない。七高と五高の記念試合がストーリーの骨格なので、もちろん勝男が鹿大に進まなければストーリー自体が成立しない。エンターテインメント故の虚構と穿ってみては鹿大に失礼であろうか。唯一の現実的な科白は母親の陽子（斉藤とも子）の「大学は東京にいくらだってあるじゃない」の一言であった。

もっとも、このシーンや、映画のなかで疑問に感じる部分は、原作（室積光『記念試合』小学館、2007年、1,600円）ではしっかりと掘り下げられている。この映画に納得できない方や鹿児島弁が聞き取れなかったという方には、映画を見た後に原作を購読されることをお勧めする。

## 旧制高校は現代にそぐわない時代の遺物か

この物語の勝男が別の勝男だったらどうなるかと一抹の不安を感じるのも事実だ。一勝男は部活と塾とに忙しく毎日深夜の帰宅。珍しく部屋にいる勝男に勝弥が昔話をしようとするが「たまの休みなんだからほっといてくれよ」などと煙たがられる。そし

て希望どおり無事慶大医学部に進んだ勝男が、ある日ふと勝弥につぶやく。「確かおじいちゃんは昔の七高<sup>ななこう</sup>って言うんだっけ、今の鹿児島大学に行っていたんだよね。」—などというシーンが飛び出してきたとしたら、画面の前のかつてのエリート達のプライドはズタズタとなろう。—「いやナナコウじゃない。それに旧制高等学校というものは……」などと一から語って聞かせようとするが、あいにく孫達の世代も忙しい。勝男は着信した携帯メールに目を落とすとあわてて家を飛び出していった。—こうあっては老医師は孤独の淵にはまりこみかねない。戦争を乗り越え、貧しい戦後を乗り越えた老人が孫の世代の無知・無気力と戦う、暗澹たる展開である。

冗談はさておき、映画のなかではジェネレーションギャップの一つのエピソードとして、鹿大の野球部員が記念試合会場の命名の由来である川上哲治を知らないという、笑えるが笑えない場面もある。

原作『記念試合』では「旧制高校は現代にそぐわない、古き良き時代の遺物として語られるしかない、ということだろうか」(31頁)と室積光にかわって登場人物がつぶやく。また、鹿児島へ発つ自分を駅頭で見送ってくれたことを勝弥は「彼らは僕のことを社会における自分たちの代表選手のように思ってくれていた」(63頁)と回顧する、この感覚。あるいは入寮式での先輩の訓示「天才的な馬鹿になれ。馬鹿の天才になれ」(64頁)の言葉。いったい旧制高校の文化や生徒の志は伝承することができるのか。彼らの存在意義は後世にどのように位置づけられるのか。是非この映画は現在そして未来の若者に見せてあげたい。

### 旧制高等学校の想いを受け継ぐ

筆者の所属する広島大学は、前身校のひとつとして旧制広島高等学校をもつ。広高は今年で創立85年を迎え10月12日には記念大会を開催した。最年少の「昭和24修」の年代でもすでに70代半ばに達し、全国規模の記念大会は今年が最後になるというのが若き同窓会幹部たちの偽らざる声となった。

事実、広高同窓会はすでに自前の事務所をたたくて広島大学総合科学部を公称の同窓会事務所とした。またこれに伴い事務所で保管していた資料のほぼ全てを筆者の職場である文書館に移管した。今年8月には関東支部会も事務所を自宅に移し、資料を文書館に移管した。ひとつの学校、それも一時代を築いた代表的教育機関のひとつの終焉に立ち会う日が迫っていると思うと、複雑な心境である。

但し暗い話題ばかりでもない。筆者は文書館の関係教員とともに平成13(2001)年より「広島大学の歴史」という全学選択の教養科目を開講している。開講当初50名足らずだった受講生も今年度180名に達した。講義の中で、旧制高校についても教え、

気の乗った年には寮歌を実際に歌わせもしている。その場では恥じらう学生たちであるが、感想文での反応は意外と良い。昔の生徒が自律的に行動し、身近なことに真剣に取り組む姿、友人との関係などを見て、羨ましく思うとの感想が寄せられる。今の自分たちよりも昔の学生の方がよほど精神的に自由だと感じた、などという趣旨の感想も見受けられる(もっとも当時の生活様式と衛生状態については不評である)。過去と未来の橋渡し役は今後も続けていく。

ちなみに広高創立85年大会では、広島大学混合合唱団の有志が寮歌を歌い、参加した同窓生に感動を与えた。学生たち独自のルートでも旧制高校との接点生まれ始めている。

### 大学アーカイブズにできること

ところで我々は近現代の教育を正当に評価する努力をしてきたのだろうか。それは旧制高等学校の教育に限らない。例えば戦後の大学教育の画期とも言える大学紛争についても同様である。戦争も知らない戦後世代、大学紛争も知らない「大衆化」学生時代の我々は、前時代の教育を単に過去の事物として追究を怠ってきたのではなかったか。我々は近代以来の教育制度の来し方について、今一度真摯に問い直す必要があるのではないか。

その取り組みの一つとして、筆者の職場ではこのほど『証言 大学紛争 一危機的状況に対する広島大学教職員の記録—』(現代史料出版、2008年9月、2,400円)を出版した。西の広大、東の東大とも称され紛争の激化した広島大学で当時最前線に立たされた関係教職員の体験を、座談会方式で記録し公開したものである。

我々はこれら教育現場の実態に関し、冷静な目で検証を続け後世に継承すべきものと、改めるべきものとの腑分けをする努力を続けねばなるまい。そしてその研究の基盤を提供する場として大学アーカイブズがある。先人の思いを継承し後世に繋げる、過去と未来とを繋げる資産を提供する役割を担う機関こそ、大学アーカイブズである。

現在、旧帝大のほぼ全てと旧官立大の一部に大学アーカイブズがある。しかしネームスクールをはじめ旧制の様々な学校を前身校にもつ多くの旧地方国立大学に大学アーカイブズはまだない。旧制諸学校の遺産をどう引き継ぐのか、あるいは現代の大学資料をどう後世に残すのか、この問題に真剣に取り組んでいる人々はまだ少ない。各大学には自らのルーツを尋ね未来に活かそうとする姿勢を、是非大学アーカイブズを整備することで表明してもらいたいと感じる。

(こみやま みちお：広島大学文書館)

## 1930年1月の立山劔沢遭難事件にあたって —本学学生らによる自己点検・活動報告—

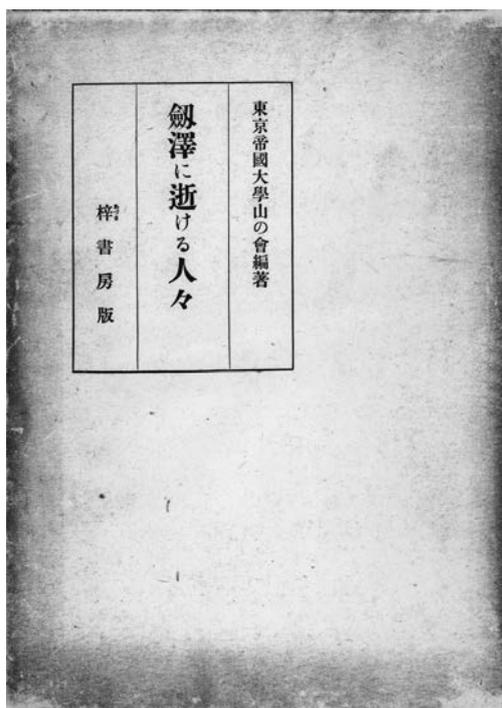
谷本宗生

筆者（谷本）は、新宿にある京王百貨店の大催場で毎年夏期に開催される大古書市に今年も足を運んだ。東西の老舗古書店らが一堂に会するとされ、古書通＝本好き人らには華やかな行事であった。筆者も、この古書市でさまざまな興味深い文献史料群を眺めつつ、自身の懐具合と相談しながら、いくつかの文献を購入した。重松一義『明治内乱鎮撫記』プレス東京、反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』八木書店、札幌市教育委員会編『旧制中学物語』北海道新聞社、『越佐が生んだ日本の人物』新潟日報社、などである。今回手にとるまで書名すら知らなかったものもあるが、とくに次の文献についてはどのような事柄に関して叙述したものであるかをすぐに理解することができなかつた。東京帝国大学山の会編『劔沢に逝ける人々』梓書房、1931年（当時定価2円）、である。日々史料室において帝国大学史、東京大学史と格闘する筆者であるが、しばしば自身の“無知”を痛感させられる。照会者へのレファレンスに応じる際や、また新たな文献史料との出会いによってそれを自覚する機会が多い。今回は1冊の古書との出会いに始まり、改めていろいろ調べてみて大いに驚かされた。

『劔沢に逝ける人々』（1931年）の冒頭で、山口昇（スキー山岳部長）が次のような序文をよせてい

る。1930年1月に生じた立山劔沢遭難事件について、その思いや状況が明瞭に示されている。「窪田〔他吉郎〕、田部〔正太郎〕、松平〔日出男〕三学士、慶大学生土屋〔秀直〕君及案内者〔佐伯〕福松、〔佐伯〕兵次両君の一行が昨冬劔沢小屋に於て遭難した事は我国登山界空前の惨事であつて独り我がスキー山岳部のみならず我国山岳界にとつて一大損失であつた。…斯くの如き有為の材を不慮の災厄によつて忽然として失つたことは国家にとつて惜しみても余りある次第である。一行は既にスキーに堪能であり登山にも永い経験家であつた。殊に窪田、田部両君は我スキー山岳部の前委員として、我部の中心人物であつた。而かも立山は両君の四高時代からの愛着の山であつて一木一石の末に至る迄悉知してゐたといつても過言ではない。…従つて遭難の確報が新聞紙上に伝へらるるや世上に一大衝動を起し冬季登山の危険について巷間に論議の花を咲かせた。…中には冬季登山を禁止することの適策なるが如き説をなす人もあつた。然し乍ら我等は断じて斯くの如き悲観論に賛同することは出来ない。冬季に高山に登ることそれ自身必ずしも無謀の挙であり無意味の冒険であるとは思はれない。…我等は一行の遭難が冬季登山に一つの貴重なる研究資料となりこれによつてその危険性が除去せられ益々我国登山界の隆盛を来すことを信じて疑はない。斯くの如き意味で我等はこの立山遭難記が多くの登山家諸君には元より広く世の識者の間に読まれんことを望んで止まない次第である。一行の死は我等にとつて余りに大なる犠牲ではあつたがその死が無意味でないことによつて我等は自らを慰めるより外はないと思ふ。』。同上書編集委員を務めた瀧山養（工学部）のはしがきをみると、本学スキー山岳部として窪田・田部OB両氏への追悼版『銀嶺に輝く 報告と追悼』（1930年）を取りまとめたが、その部数に限りがありすぐに品切れとなり、増補・改訂版として遭難者全員を追悼する『劔沢に逝ける人々』を刊行した事情がよく分かる。『銀嶺に輝く』は、現在本学総合図書館（書庫）に所蔵されている。落手した1931年の『劔沢に逝ける人々』は本学図書館では所蔵されていないが、1978年に大修館書店から復刻版が発行されており、本学教養学部図書館でそれは所蔵されている。

『劔沢に逝ける人々』を入手する前は、筆者は次のような点を大まかに理解していた。大学学生課が1937年6月に編集した『夏休の栞』（小型パンフ



全84頁)の中で、「スキーをなす者の為に」が在学生らに向けて初めて掲載される。「本書に冬をシーズンとするスキーの記事を入れるのは妙な様であるが、多数の諸君から本書を夏休に限らず冬休にも利用し得るものにせよとの注文があるので、来るべき冬に初めてスキーの爽快さを味はむとする者に参考となることを列記する。…山スキーやスキーツアをやるには必ず熟練した経験者の指導に従ひ、天候に十分注意し、自己の技術を過信して無理を犯すことの絶対のないやうにしなければならぬ。…」(73～74頁)。また、大学運動会が発行する『運動会報』創刊号(1934年)の中で、スキー山岳部の中屋健次(文学部)が「本学スキー山岳部に於ては他の諸大学のそれと趣を異にし、部員は凡て高等学校時代に相当の試練を受け、技術の上からも、経験の上からも完成された山岳家である」(65～66頁)と明言する。1930年1月に生じた立山剣沢遭難事件は、いったいどのような位置付けとなるのであろうか。

『剣沢に逝ける人々』(全193頁)は、大きく「遭難記録」(66頁)と「遺稿」(127頁)から構成されている。巻頭などには、遭難者らの肖像写真や遺書などが挿入されている。遭難事件に対する記録資料として後世に活用するために、窪田他吉郎(1924年四高卒、1927年工学部卒、大学院生)と田部正太郎(1926年四高卒、1929年工学部卒、内務省勤務)の手帳(遺書)を同上書の中では公表している。「一月廿日午前二時頃雪崩ノタメ死ス残念 不孝ノ罪ヲワブ 諸氏ニスマヌ……アア残念ナリ モウ如何トモ出来ナイ 人間ノ力ハ弱イモノ…」(窪田遺言)。「只今窪田ト二人デハ土屋松平両君ニ対シテキノドクニ思ツテマス 大学ノ山口沼田両先生ニヨロシク マムシハ偉クナレマセンデシタ(略) 音モナク 降ル雪ハアハナダレヲオコシヤスイカラ外ヘ出ント シタガダメダル 県当局ガミソコナツタノダ 私ノヤリ方ハマチガテナイ(略) センシタイザー 窪田君ノヲ浅野君ニマカス 父サン私ハ足ガキカナイノデス モウスグ窒息デお別れでせう 宗作ガクレバタスカルガダメラシイ 父母ノ長イ間ノ恩ヲ謝シ不孝ヲワビ… モウ長イ時間ガスギタ 窪田君ト二人…テキル 九日午前4時20ニヤラレル 父母ヨサヨナラ 小屋ヲ改メヨ… 死ヌノモ辛イモノナリ ココ…」(田部遺言)。不慮の雪崩によって遭難し、残された生をなんとか全うしようともがく青年らの姿がとても印象的である。

遭難事件に対するさまざまな批判を受けて編者である大学山の会は、次のような姿勢に徹している。「私達はここにこれ等を批評したり反駁したりしようとは思はない。…彼等元気に満ち命に溢れた若き青年達は、彼等の愛する冬を暖かなる室内に蟄居して遊惰なる新春気分に入りながら過ごすことに興味も満足ももたなかつたのであつた。…今回の遭難は

全く愛に殉じた登山家の運命ともいはれよう。かうした熱情的な懸命的な山岳に対する努力を是認しようと否認しようとそれは観る人の自由である。ただ我々はこれを否認しようとする人達に対して次の一語を与へておかう。「生命に燃ゆる者は生命のために生命を捧げる」と。」(57～58頁)。大学山の会は、遭難者らへの追悼をとおして、山を愛する者の名誉や誇りをしっかり固守しようとした。

スキー山岳部と山の会との関係については、東京大学山の会『山と友 東大山の会五十周年記念』(1981年)を読んでみてよく分かった。「一般向けに追悼文集『剣沢に逝ける人々』を出版する運びとなった。その際、印税の受取り手として正式に登録された組織が必要になり、偶々登山を志向する現役とOBとの強い結びつきの機運も熟していたので、ここにスキー山岳部並びにOBを含む一つの山岳愛好組織としての東京帝国大学山の会が、東大運動会(昭和四年発足)の中に設立されることになったのである。」(中村純二「東大スキー山岳部の創立前後」3頁)。「山と友」のあとがきにも、「山の会発足のきっかけとなった昭和五年一月の剣沢における遭難報告書『剣沢に逝ける人々』の復刻版が最近出版され、その印税が山の会に入金になったことも一因であったが、同時に大正十二年東大スキー山岳部(TIUSAC)が発足して以来、六十年近くに亘り、一貫して登山活動を続けて来た東大山の会として、日本の山岳界に対する責任といった意味でも作っておくべきだという気持が働いた」(436頁)と記されている。1930年1月に生じた立山剣沢遭難事件が大学山の会発足の契機となり、また山の会50周年に際しても『剣沢に逝ける人々』の復刻版が刊行されるといった歴史上の不思議な因縁をもつ。

スキー山岳部と山の会のように、本学の課外活動、文化活動団体・運動部において、在学生と卒業生OBとの歴史的な関係性はどうなっているのか?という興味が自然にわいてくる。たとえば、筆者のもとに先日送られてきた『東京大学陸上運動部120年史』(2007年)は、陸上運動部のOB組織である陸上運動倶楽部が編集・発行元となっている。1925年4月、陸上部OBらの親睦を深める目的で赤門陸上会が組織されたことが『帝国大学新聞』第115号(「愈々生まれた赤門陸上会 オールドボーイズが若返つて」)からうかがえる。会の発起人として、末弘巖太郎(1888～1951年)、仁井田益太郎(1868～1945年)、鳩山秀夫(1884～1946年)らの名前も挙がっている。まだまだ筆者が知りえぬ歴史上の事柄は拡大していき、これに対峙してこれからも新たに調べを進めていかなければならないであろう。そのような意味では、1冊の古書との出会いも偶然ではないのかもしれない。

(たにもと むねお: 大学史史料室)

受贈図書一覧（抄）（平成20年2月～平成20年9月）

一高同窓会会報 第397～400号 一高同窓会	平成20年2月～8月	東北学院資料室 vol. 6, 7 東北学院	平成18年12月 平成19年12月
寮歌こぼればなし 一高同窓会	平成19年12月	名古屋大学大学文書資料室紀要 第16号 名古屋大学大学文書資料室	平成20年3月
東京大学宗教学年報 25（別冊） 高橋 原（東京大学文学部）	平成20年3月	アルケイア－記録・情報・歴史－ 第2号 南山大学史料室	平成20年3月
東大130キャンペーン活動報告書 谷本宗生	平成20年7月	成瀬記念館 No.22 日本女子大学成瀬記念館	平成20年1月
UP 424～431号 東京大学出版会	平成20年2月～9月	広島大学文書館外部評価報告書 広島大学文書館	平成20年3月
剣澤に逝ける人々－東京帝國大學山の会編 谷本宗生	昭和53年9月	大学論集 第39集 広島大学高等教育研究開発センター	平成20年3月
小樽商科大学史紀要 第2号 小樽商科大学百年史編纂室	平成20年3月	武蔵学園史年報 第十三号 武蔵学園記念室	平成20年3月
神奈川大学史資料集 第二十四集 神奈川大学資料編纂室	平成20年3月	大学史紀要 第十二号 明治大学史資料センターグループ	平成20年1月
関西大学年史紀要 第十七号 関西大学年史編纂室	平成20年3月	戦後教育史研究 第21号 明星大学戦後教育史研究センター	平成19年12月
関西学院史紀要 第十四号 関西学院学院史編纂室	平成20年3月	桃山学院年史紀要 第27号 桃山学院史料室	平成20年3月
九州大学大学史料叢書 第16輯 九州大学大学文書館	平成20年3月	立命館百年史紀要 第十六号 立命館百年史編纂室	平成20年3月
京都大学大学文書館研究紀要 第6号 京都大学大学文書館	平成20年1月	早稲田大学史記要 第三十九卷 早稲田大学大学史資料センター	平成20年2月
総長裁量経費プロジェクト『戦後学生運動関係資料』解説・目録 京都大学大学文書館	平成20年3月	大学所蔵の歴史的の文書の評価・選別についての基礎的研究 谷本宗生	平成20年3月
駒大史ブックレット 7 駒澤大学禅文化歴史博物館	平成20年1月	戦後教育改革期における女性の大学教育政策と門戸開放の実態 湯川次義（早稲田大学大学院教育学研究科）	平成20年3月
成蹊学園史料館資料集 ④ 谷本宗生	平成20年3月	お雇い教師ヘンリー・ダイアーを介したスコットランド間の教育連鎖の研究 谷本宗生	平成20年3月
玉川大学教育博物館紀要 第5号 玉川大学教育博物館	平成20年3月	書陵部紀要 第五九号 宮内庁書陵部	平成20年3月
中央大学史紀要 第十三号 中央大学入学センター事務部大学史編纂課	平成20年2月	企画展図録 王子・滝野川と渋沢栄一－住まい、公の場、地域－ 渋沢史料館	平成20年3月
東北大学史料館紀要 第3号 東北大学学術資源研究公開センター史料館	平成20年3月	日本教育史研究 第二七号 谷本宗生	平成20年8月
平和への遺書・遺品展－戦没青年との対話（図録） 岡安茂祐（日本戦没学生記念会）	平成14年8月	東大山の会五十周年記念 山と友 谷本宗生	昭和56年10月

財団法人野間教育研究所所蔵学校沿革史誌目録 高等学校編 野間教育研究所	平成20年3月	企画展 「教養」のゆくえ－東北大学教養部の模索－(ポスター) 東北大学史料館	
Ouroboros 第33,34号 東京大学総合研究博物館	平成20年4月,7月	清冽の炎 波濤の冬－1968東大駒場 谷本宗生	平成19年12月
大学アーカイヴズ No.38 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会	平成20年3月	大東文化歴史資料館だより 第3,4号 谷本宗生	平成19年11月, 平成20年5月
金沢大学資料館だより 第30号 金沢大学資料館	平成19年7月	ニューズレター明治大学史 vol.4 明治大学史資料センターグループ	平成20年3月
東北大学百年史編纂室ニュース 第13号 東北大学百年史編纂室	平成20年7月	東北大学創立一三〇周年記念事業 知のプロムナード ナビゲーション・ブック 谷本宗生	平成20年7月
校史 Vol.20 國學院大學學術メディアセンター	平成19年12月	東大先端研物語 東京大学先端科学技術研究センター	平成20年4月
かわら版 第257～264号 谷本宗生	平成20年2月～9月	井上哲次郎の欧州留学と『哲学字彙』第三版の多言語表記(抜刷) 真田治子(埼玉学園大学人間学部)	平成19年12月
大学史研究通信 第53,54号 谷本宗生	平成20年1月,4月	物性研50年の歩み 東京大学物性研究所	平成19年11月
勸学院の雀 第151～156号 谷本宗生	平成20年3月～7月	詳説日本史図録 山川出版社	平成20年1月
1880年代教育史研究会ニューズレター 第20～22号 谷本宗生	平成20年1月～6月	ビジュアル版 神戸大学物語 神戸大学企画部社会連携課	平成20年3月
拓殖大学百年史 資料編六,海外兄弟校 拓殖大学創立百年史編纂室	平成20年3月	東京大学大学院教育学研究科附属 心理教育相談室の50年 谷本宗生	平成20年3月
ぎんなん No.98 谷本宗生	平成20年2月	芝浦工業大学創立80周年記念刊行物 芝浦工業大学保存歴史資料目録 谷本宗生	平成20年3月
特別展 昭和20年の中学生展(ポスター・チラシ) 立命館大学国際平和ミュージアム		増訂 軍人勅諭成立史 天皇制国家観の成立<上> 梅溪 昇	平成20年4月
緑丘アーカイヴズ 第7号 小樽商科大学百年史編纂室	平成20年3月	ミッション・スクールと戦争－立教学院のディレンマ－ 立教学院史資料センター	平成20年3月
生誕120年記念 小泉信三展(ポスター・チラシ) 慶應義塾福澤研究センター		医学部卒業アルバムにみる日本近代医学の歩み 医学生とその時代 永井良三(東京大学附属病院)	平成20年4月
神戸大学史・特別展 神戸大学百年の歩み(ポスター) 神戸大学百年史編集室		「自己点検・評価」・「教育研究」と大学アーカイヴズ(抜刷) 谷本宗生	平成20年3月
桃山学院の歴史 2008 桃山学院史料室	平成20年4月	東京大学医学部病理学教室百周年記念誌 谷本宗生	平成2年5月
啐啄 第46,47号 日本の教育改革を進める会	平成20年3月,8月	わだつみのこえ No.128 岡安茂祐(日本戦没学生記念会)	平成20年7月
神陵文庫別冊 戦中・戦後三高小史 三高自昭会三高記念室	平成20年1月	<うま味発見100周年記念> ドキュメンタリー・ドラマ「AMBITION(志)－化学者 池田菊苗－」(DVD) 矢野量子(グループ現代)	

## 史料室日誌抄録（平成20年2月～平成20年9月）

- 2月20日（水） 第65回史料保存委員会開催（本部棟12階中会議室にて）。  
2月27日（水） 谷本室員、大東文化大学荒井ゼミの見学対応。  
3月19日（水） 『文部省往復』の箱詰め作業完了。  
3月26日（水） 『東京大学史史料室ニュース』第40号刊行、発送。  
『東京大学史紀要』第26号刊行、発送。  
『内田祥三史料目録』刊行、発送。  
『大学の自己点検評価の歴史的調査：基礎史料集』刊行、発送。  
7月22日（火） 細谷氏（広報センター）・谷本室員、大学写真の調査（学研資料センターにて）。  
7月28日（月） 谷本・小川室員、スクラップブック3冊受入れ（法学部より）。

### この間の閲覧者数

学内者 2名  
学外者 19名

### 主な学外閲覧者所属機関

神田外語大学、東北大学、東京音楽大学、立教大学、フンボルト大学、東京国立博物館  
憲政記念館、三高記念室、首都大学東京、創価大学、一橋大学、東京工業大学

### その他

文献撮影・複写許可件数 15件  
調査（照会）件数 54件

### 表紙の写真に関して

育徳園心字池は、戦前・戦時下をとおして大学構内の池として存在した。漱石の『三四郎』の舞台ともなったが、時に学生らが池で泳いだりスケートをしたりしたという。戦後になって、新制東大生らのオアシス、三四郎池として広く認知されたといえる。本学創立130周年を迎えた今、三四郎池もまた東大とともに再評価されようとしている。

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第41号

発行日：2008年11月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077（直）

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2